

塩加減の世界史

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 笹川裕史



① はじめに

本稿は、生活必需品の塩を主題とした世界史Aの授業案（1時間）である。授業は、生徒への発問を軸にした。当該の時代や社会を扱う際に、各小問を利用していただくのも有意義であろう。

② 《導入》 塩の生産

「鹽」の読み方は？

日本では、縄文時代より海水を煮つめて塩をつくっており、奈良時代からは塩田で塩がつけられていた。9世紀の東大寺には「塩木山」という荘園があった。製塩用の薪を供給するための荘園で、塩田とほぼ同じ面積であった。日本の塩田は、時代とともに揚浜式・入浜式から流下式へと改良されたが、1972年の法改正で、工場でのイオン（交換）膜法による製塩に切りかえられている。

一方、中国は広大な国土に比して海岸線の総延長が日本の3分の2しかなく、海岸から遠い内陸部の塩湖や井塩（塩分の濃い井戸水）は貴重だった。とくに山西省の解池は中原唯一の塩湖で、夏王朝はここに都をおいたとされている。そして長安・洛陽には解池の塩が供給されていた。塩の正字である「鹽」の鹵は岩塩を表しているという。

世界全体では海水由来の塩は少ない。現在1年間で約2億9000万tの塩が生産されているが、大半は岩塩や塩湖などからの採塩である。

③ 《展開1》 塩と環境

メソポタミアでは、灌漑の利用によって農業生産が増大した。当地での灌漑の目的は何か？

湿潤な地域では、渇水期に降水の不足分を補うことが灌漑の主目的である。しかし降水量よりも水分の蒸発散量が多い乾燥地域では状況が異なる。

土壌中の塩分を含んだ水が毛細管現象（液体に細い管を入れたとき、管のなかの液体が外の液体の水平面より高く、または低くなる現象）によって地表にまで上昇し、蒸発したあと、残された塩分が農作物の発育に悪影響を及ぼすからである。したがって乾燥地域での灌漑は、給水のみならず、地表の塩分を洗い流すためにも重要であった。

しかし、それでもメソポタミアではウル第3王朝の末期（前21世紀ごろ）に、収穫量が低下し、栽培品種が小麦よりも耐塩性の強い大麦にかわっていく（ちなみに、稲は小麦よりもさらに耐塩性が弱い）。当時の粘土板には「耕作地が白くなる」という塩害の記録が残されている。

また都市文明の進展に伴って、鉄・塩・れんがの需要が増大した。これらを生産する過程で大量の薪炭が消費され、ティグリス川上流地域の森林破壊が進んだ。そして保水力を失った山間部より洪水時に大量の土砂が流出し、下流の耕作地に堆積した。こうして灌漑が機能不全となり、塩害が深刻になったと推測されている。

④ 《展開2》 塩と交易

西アフリカの塩金交易での一般的な隊商（キャラバン）のラクダの頭数はどれぐらいか？

7世紀ごろ、アラブ人がサハラ縦断交易にラクダを導入した。そして12～16世紀にかけてニジェール川流域のガーナ・マリ・ソンガイの3王国では、ムスリム商人がもたらす塩の対価として砂金を支払う塩金交易が行われた。

14世紀のイブン=バットゥータの『大旅行記（三大陸周遊記）』によれば、一般的な隊商のラクダの頭数は1000程度、ときには数千頭の隊商もあったという。隊商の旅は冬の6か月間で、夏は休みとなる。例えば、現マリ共和国の岩塩鉱山のタウ

〈図1〉ムスリム商人とマンサ=ムーサ 塩が金と同じ重さで取り引きされたという。マリ国王マンサ=ムーサは、メッカ巡礼時に各地で大量の金をふるまった。(『最新世界史図説 タペストリー 十六訂版』p.131②) 写真：ユニフォトプレス

デニから700km南のトンブクトゥまで片道3週間で、大人のラクダは平均4枚の塩板(約120kg)を積荷としていた。

ヴェネツィアの街区(区画)の起源は何か？

10世紀のヴェネツィア人は、ラゲーナ(潟)の塩田でつくられた塩を、内陸の諸都市に販売していた。やがて彼らは、ライバル都市の塩田を破壊して、ヴェネツィアの塩だけを購入するよう周辺地域に義務づけた。ヴェネツィアは、網目のような運河によって街区が形成されているが、それはかつての塩田の区画とそっくりだという。

しかしラゲーナの塩田は、河川の洪水や海水の侵食に対して脆弱だった。14~15世紀、ヴェネツィアは塩田を放棄し、かわりに他国の塩田を数多く支配した。塩の独占販売で巨利を得たのである。

⑤《展開3》 塩と権力

英語の給与“salary”の語源は何か？

紀元前107年のマリウスの軍制改革によって、古代ローマの兵士は、志願制となり給与として“sal(ラテン語の塩)”を受け取った。これが“salary”の語源である。のちに塩と同額のソリドゥス金貨が支払われたことから、兵士を英語で“soldier”とよぶようになったという説もある。

唐では、758年の専売制によって、それまで1斗(約6ℓ)10銭であった塩価はどうなったか？

中国の歴代王朝は、民生と財政の安定のために

塩政を重視した。ここでは、漢・唐・元の3つの王朝のできごとを簡単に紹介しておく。

紀元前119年、漢の武帝は塩と鉄を専売とした。外征による財政悪化の改善と豪商の勢力抑圧が目的だった

〈図2〉塩引 (『最新世界史図説 タペストリー 十六訂版』p.113②) 写真：シーピーシー・フォト

武帝の死後、法家と儒家の間で専売制の是非が議論され、『塩鉄論』にその経緯がまとめられた。

唐では758年、安史の乱による財政悪化を改善するため塩の専売が始まった。その直後に価格10銭の塩が110銭とされたが、それは序の口であった。782年に210銭、788年に310銭、地域によっては370銭に値上げされた。塩価が“高騰”するなか、各地に現れた密売業者(塩徒)は、塩を“半額”で売ってばくだいな利益を得た。また民衆も塩徒を歓迎し、積極的に支援した。875年の黄巢の乱に多くの民衆が加わり、唐の滅亡の一因となったゆえんである。黄巢の乱のほかにも、のちの各王朝では、塩徒の関係する反乱が数多く起きていく。

元の中央財政は、農作物の税収よりも専売収益と商業税を重視した。とくに塩の専売収益は財政の5~8割に達した。政府は、塩引(塩の販売許可証)を商人に売却して利益を得た。例えば1276年に1枚9貫だった塩引が、1329年ごろには150貫に急騰していた。塩引は宋代より利用されていたが、元は、銀と連関させることで塩引を事実上の高額の補助通貨としたのである。

〈図3〉のガンディーは、このあとイギリスの官憲によって逮捕された。その理由は？

イギリスの植民地インドでは、19世紀初めに国内の製塩業が崩壊した。東インド会社が綿布を運搬するときに船のバラスト(重し)として用いた塩の価格がインド産の塩より安かったためである。

その後、インドに輸入される塩を独占するようになったイギリスは、インドに対し過酷な塩税を課した。1860年代には塩税は当初の20倍になった。1920年代中ごろの塩税収入は6300万ルピーで、インド政府全体の歳入のほぼ3%を占めていた。

「塩税は権力の濫用だ」と考えたガンディーは、1930年3月12日にアーメダーバードから、80人弱の支持者とともに海岸に向かって歩き出した。4月6日早朝、数千人にふくれ上がった民衆の前で、ガンディーは浜辺の塩と泥のかたまりを手にとり、煮はじめた。そしてその一部始終をマスコミが世界に報道していたのである。

ダンディー海岸までの386kmのこの「塩の行進」は、民族や宗教の違いをこえて、インド人を一つにまとめる非暴力・不服従の抵抗運動となった。大勢の人々がガンディーを見習い、「製塩」を始

めた。イギリスは4月末までに数千人を逮捕し、ついに5月初めにはガンディーも逮捕されてしまう。

だが翌1931年、イギリスは、インドでの製塩を認めた。塩の行進は、インドのイギリスからの独立運動の重要な転換点となったのである。

〈図3〉塩の行進 沿岸で塩を採取するガンディー。(『明解 世界史A』p.171④) 写真：ユニフォトプレス

6 《整理》 塩と産業

前近代の社会において、調味料以外にも塩の重要な使い道があった。それは何か？

世界各地で、宗教儀式と塩は密接に結びついている。だが日常生活で最も重要な用途は食品保存(塩蔵)であろう。食材を塩分濃度の高い状態におけば腐敗が防げる。魚介類の塩辛や野菜のつけ物は、代表的な塩蔵品である。塩蔵の始まりは、

農耕の開始とほぼ同じ時期と推測されている。

14世紀初めにフランドルで始まったとされるニシンの樽づめは、たんぱく質の豊富な食品を保存する点で画期的だった。塩とニシン貿易でハンザ同盟は繁栄した。また「アムステルダムは、ニシンの樽づけで築かれた」ともいわれている。

大航海時代の船乗りの胃袋を満たしたのは、ニシン・タラの塩づけやハム・ベーコン・ソーセージ(畜肉の塩蔵品)であった。こういった食料の保存技術がヨーロッパの世界進出を支えていた。

2016年度の日本における塩の年間消費量800万tのうち、食用に使用されたのは、およそ「100万t・200万t・500万t」のどれだろうか？

日本国内の塩の生産量は93.8万t(世界33位)で、それらはほぼ食用にあてられている。日本の塩の自給率は12%で、不足分はメキシコやオーストラリアから大量に輸入している。消費量の75%(約600万t)はソーダ工業用で、また約100万tの塩が融雪剤や家畜の飼料に利用されている。

化学の発展に伴い、工業分野での塩の利用が19世紀に本格化した。価格の急落も、塩の入手を容易にした。むしろそれ以前は、意図的に塩の生産量を抑え、希少品としての高い売値と塩税を正当化していた可能性があるという。

塩は、水にとかして電気分解すると塩素と水酸化ナトリウムに分かれる。そして前者からは、塩化ビニール製品や消毒薬・薬品などが、後者からは、石鹼や洗剤・漂白剤などが、さまざまなものが製造されている。今や塩は、食用にとどまらない、現代社会に不可欠な物質となっているのである。

【おもな参考文献】

- ・片平孝『サハラ砂漠 塩の道をゆく』(集英社、2017年)
- ・佐藤洋一郎・渡邊紹裕『塩の文明誌 人と環境をめぐる5000年』(日本放送出版協会、2009年)
- ・R・P・マルソーフ著、市場泰男訳『塩の世界史』(平凡社、1989年)
- ・マーク=カーランスキー著、山本光伸訳『「塩」の世界史 歴史を動かした、小さな粒』(扶桑社、2005年)
- ・佐伯富『中国塩政史の研究』(法律文化社、1987年)
- ・ビエール=ラズロ著、神田順子訳『塩の博物誌』(東京書籍、2005年)